

# 幕藩体制内に於ける藩家老の

## 行政意識について

—— 福岡藩家老吉田治年の場合(一) ——

三 木 俊 秋

### 序 章

この小稿は福岡藩の家老を勤めた家の一つである吉田家の第五代の当主吉田治年が、職分(福岡藩内家老格の呼称)となつてより、当役、正式には御当用本締役詳しく言えば「御勝手方御財用裁判役」と云ふものに正徳三年三月に任命されて享保六年三月に当役辞退が許されて隠居をするまで凡そ、八年間にわたる時代を中心として、福岡藩内の行政に幕藩体制内の封建的機構の制約のもとに、如何なる意識をもつて対処していったかを知らんとする意図のもとに執筆したものである。

家老吉田治年が当役についていた時代は、時あたかも將軍家宣の就任間もない時でその下に側用人間部詮房あり新井白石が参謀役となつて諸改革を着々と実行していた。藩主は六代宣政であるが病氣となり、蟄居して支藩である直方藩から藩主長清の子菊千代を養子に迎えたり、長崎警備を長清が代行する様に幕府から命ぜられたり、又本藩の政事の後見を長清が行つたり、長清没後は直方藩の吸収が行われたりする福岡藩政史上極めて珍しい特異な時代であつた。

この研究に利用した資料は、主として九州大学九州文化史研究所に所蔵されている吉田家文書によった。中でもこの時の当事者である吉田治年が著した吉田家伝録三十巻は、黒田家に播州以来の譜代の家臣として仕えて来た吉田家の家譜で、このうち第十五巻以下十六冊が治年の時代の記事であり、この記録によって治年の政事に掌った際の意図を知ることが出来る。又同吉田家文書の中には直方（もと東蓮寺と称す）藩主長清が福岡藩政後見の時代に治年に与えた数多くの書状によって治年との関係を推察することが出来る。

吉田家伝録最終巻である第三十巻の跋語には、

吉田家伝録一ヨリ三十二至り治年草稿享保六年ヨリ同  
二十年ニ至ルシテ享保二十年乙卯の歳二月十九日岡部平蔵恒久城代ニ頼テ

清書元文二年丁巳ノ歳六月朔日淨書シ畢リ又此外附録吉田系図一卷兵器図解一卷吉田家臣伝一卷有り

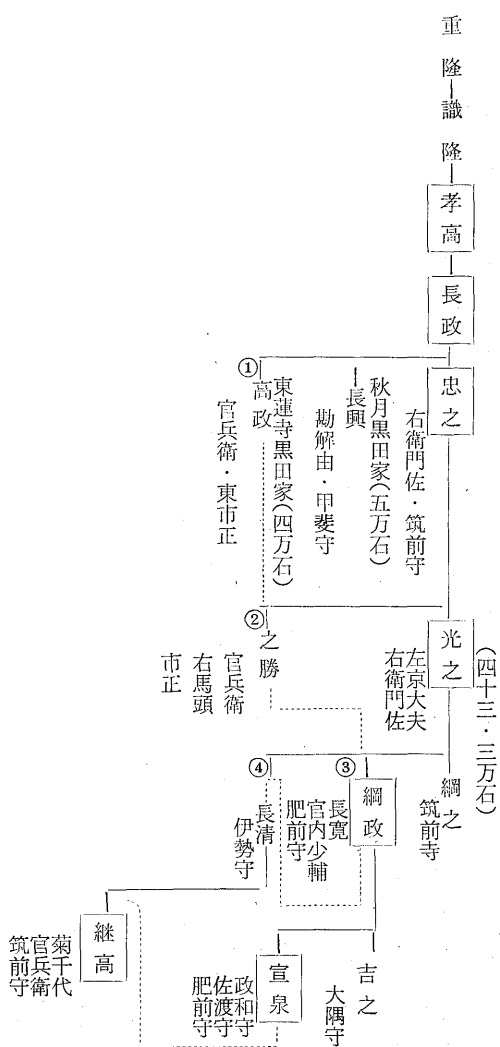
又云享保六年辛丑ノ歳三月十一日治年隠退ノ後世事預リ知ラズト云ヘ氏継高君時々治年ヲ召シテ尊命ヲ蒙リ或

ハ賚或ハ献上物ノ類年々竹翁自カラ書シテ此君居秘録ト称ス享保十二年丁未ノ歳ヨリ同二十年乙卯ノ歳ニ至リ

九卷有り此録ハ秘封シ子孫ニ遺ル者也

と書かれてあり、治年が家老職隠退後の生涯をかけて、子孫の為に書残したものであることがわかる。

今、福岡藩主黒田氏の家系の必要な部分を寛政重修諸家譜によって図示すれば次の様になる。点線は養子関係をあらわしている。又「」で囲んだのは福岡本藩主、○の中の数字は直方支藩（はじめ東蓮寺と称す）の継承順序である。



吉田治年が成人して「中老」を命ぜられる迄の間の福岡藩の藩主は四代光之であった。

この藩主光之の時代には、後嗣綱之がいたのであるが、光之は將軍に御目通りまでまさせている子供の綱之を次第にうとんずる様になり延宝五年（一六七七）二月幕府に正式に願出て廢嫡し、支藩直方藩主であった次男の長寛を後嗣としているのである。綱之は聡明で文才もあり武芸・馬術にも長じていた人らしいが、この綱之の付家老となった立花実山は、綱之が光之毒殺の陰謀を企てたと疑われその家臣が切腹させられる事件があり、その綱之が宝永五年（一七〇八）七月恨みをのんで死んだ五ヶ月後には立花実山は、差向けられた小者のため毆殺され、そのまま土中に埋められると云う悲惨な最期を遂げているのである。この立花実山は和歌は後水尾院の御意にかない、又禪を学んでは、

今も残る東林禪寺を建立し、茶道に於ては利休と関係深い「南坊録」を現在に伝える役を果たした藩中きつての文化人であつたのである。(物語藩史3 福岡藩) 治年が若い時にこの様な悲惨な事実を目撃していることにより、彼が家老として職責を果たしていくに當つての心構えも、寸分の油断も許されない異常な緊張にかられていたことが想像されるのである。綱之が光之からかるんぜられていた事情を物語っている資料の一端をここに掲げてみよう。(三奈木黒田家文書六七号「從諸方来る書簡 一軸」)

## 覚

一 丑年之春筑前事国元江御暇之願申上候儀前年作法乱諸人之嘲不<sub>(綱之)</sub>及<sub>(綱之)</sub>是非次第候故、在江戸ニ而ハ万事改めも仕

にて可有之と存雅楽殿河内殿大和殿日向殿山城殿遂ニ内談ニ国元江召連靜成所ニ而幾度も加<sub>(綱之)</sub>異見ニ并付置候家頼共

をも相改め附候て以来乱かわしき事無之様仕為參勤為可申同道にて在国候、其段何も委細存之前候事。

一 権兵衛儀外成家督申付家老職ニ致候儀、我等以存念如此候ヘハ厚恩忘却仕間敷と存知肝要之時節筑前江相附候其上

先年於<sub>(綱之)</sub>三江戸一筑前ヘ相勤候次第猥成儀無之神妙ニ候通具ニ聞届候其時分吉田久太夫相詰有之能存知候暮しも実儀

ニ有之と存知雅楽殿河内殿大和殿日向殿山城殿江内談申筑前江附之候先年之勤宜候段権兵衛ニも度々申聞候事。

一 五郎左衛門儀取立之者ニ候ヘハ我等ノ心行をも能存知候付、是又たしかに存、附遣し此段をも前以雅楽殿河内殿大

和殿日向殿山城殿江申達置候事。

一 兩人儀右之次第第二候ヘハ太鉢ニ申合筑前江附遣候とも朝暮工夫を加、筑前江致勤仕行跡儀ニ不当事共達而異見可

申儀ニ候、殊去ル年国元ニて筑前ヘ我等度々加異見參勤候時分取極条々堅申合候其書付をも権兵衛ニ相渡兩人とも

ニ淵底存知之前ニ候然処ニ一ヶ条も改リ不申候皆共儀誓紙ニ不<sub>(綱之)</sub>及<sub>(綱之)</sub>事勿論ニ候へとも筑前存所之為旁靈社誓紙申付

候其前書ニも身命不願異見可仕と有之候、彼はニ付我等存念を相守幾度も強異見可申儀候、且又我等江直ニ筑前守

以誓言禁酒仕候段、何も能存ながら皆共として、酒宴乱立を進め度々及ニ乱酔、筑前覚悟弥悪敷仕なし候儀、前代未聞ニ候、第一以ニ誓言、請相候酒をやぶり候儀、此方江不レ得内意、何もととして不レ苦とゆるし候儀、我等をかるしめたる仕方言語道断ニ候、其上求馬殿主膳殿相催酒宴之次第一々不届ニ候、唯今我等在世にて右之ことく段々申合候儀をさへ将元之間ニ違変仕候説別道無レ之ニをゐてハ上下共ニ乱カハしき仕方長シ如何様之為躰ニ成行可申も難斗候彼、是以此度之始末不レ及ニ是非ニ候事。

(黒田重時)

付り求馬殿主膳殿江数年我等申合候儀并去々年国元江而之仕組之次第権兵衛五郎左衛門可ニ申達ニ候、然ルニ我等江内証不レ被ニ相尋、何もと申合せ酒宴乱立ヲ催し不届之由申候ハ、我等手前ハ皆共請相申由ニ付不思議にて国元江尋不レ申旁以無調法之仕合悉恐仕候由被レ申候事

(カ)

筑前禁酒之上ハ皆共も曾而酒給申聞敷旨直ニ申聞使以も申達候、然処自分之慰ニも酒宴仕儀我等之詞を無益ニいたし候事は又可レ為ニ不義ニ候事。

(光之)

一上野花見としていつれも同道ニ而未明ガ罷出、及ニ夜陰ニ罷歸由候、若き主人と申、火籠ノ時分と申、又ハ客来も可レ有レ之候、其顧もなく遠方江罷出候儀不届之心入ニ候其節も町人之振舞を請乱酒之由候、此外他所にて折々酒宴之沙汰有之候事。

一我等参勤前屋敷にて乱酒之次第定而寛可レ有レ之候、絶ニ言語ニ候事。

一長屋江筑前を申請候節末々ノ者も椅迄ぬき及乱酔之由候、禁酒仕居候主従奇怪之仕方ニ候事。

(光之)

一我等暮し忠之公より之風俗を相守候筑前も他所之風ニかまひ不レ申、国風ニいたし候へと数度申聞候皆共も存知候通ニ候、然ルニ酒宴遊興猥成風俗を進め申事不忠不義之仕合候事。

(綱之)

(酒井忠明)

一筑前内外之儀ニ付少にても替事候ハ、早々国元江可ニ申越ニ候勿論河内殿江諸事得ニ内意ニ候へと申聞候、然ハ最前堅申合候通を仕替候儀と申別而替たる心得ニ候へハ国元江も窺河内殿江も可ニ申達ニ之処、無ニ其儀ニ、河内殿ガ別儀

無之哉と度々御尋候へとも、筑前作法一段能候と迄申、何事をも不<sub>二</sub>申聞<sub>一</sub>候由河内殿被<sub>レ</sub>申候、是又不届之仕合候事  
「国元にて段々申含為<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>参勤<sub>一</sub>候次第雅楽殿・河内殿・大和殿・山城殿・日向殿江権兵衛・五郎左衛門早速致候候  
点可<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>候、弥以被<sub>二</sub>思召寄<sub>一</sub>候儀も筑前江無<sub>二</sub>御延慮<sub>一</sub>被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>下候様にと申上候へ、書中ニハ難<sub>二</sub>申述<sub>一</sub>候  
通申聞候処<sub>五</sub>人之御衆へ終不<sub>二</sub>申達<sub>一</sub>候由、五人共<sub>二</sub>此度我等へ被仰候、以之外之仕方<sub>一</sub>候事。  
一此度之酒宴乱立甲斐守をも相加申候故あなたにても其風俗長シ苦々敷事共有<sub>レ</sub>之候、今度異見申候偏去々年何も之  
仕方より如何候事。

一去度五郎左衛門罷下候刻雅楽殿河内殿より口上筑前作法も能候間心安存知候様ニとの儀候、今度雅楽殿・河内殿被<sub>レ</sub>  
仰候、久々ニテ相達之事。

卯三月廿五日

この資料から綱之が酒乱の性格があり幕府の老中の威力を背景に禁酒を誓はされていたことが知られ、粗暴なところがあり、光之の指示にも従わない豪放な面をもっていたと考えられる。監視に当るべき家老共は勿論支藩の秋月藩主をも共に酒宴に捲き込んでゐたからなかつたのである。そのためにその生涯は苦しいものであった。このような主君を持って詰腹を切らされたり、殴り殺された家老も哀れである。こう云つた世代に生きてきた吉田治年は、あやまちない様に身を処して行くため、家老として細心の注意と、毅然たる態度を以て勤めてゆこうとするのである。

光之は元禄元年（一六八八）六十才で次男肥前守綱政に領国を譲り隠居し、三男伊勢守長清には直方藩五万石が与えられた。光之は宝永四年（一七〇七）五月二十日に八十才でなくなっている。

吉田家伝録によれば吉田家の初代吉田彦岐長利は、その父を八代六郎左衛門道慶と云い播州飾東郡八代邑に生まれた累代播磨国の郷土の家で、黒田藩主の祖黒田官兵衛孝高が播州姫路城にいた時仕官し、黒田孝高の命で家臣吉田喜三右衛門の家を継いで吉田六之助と称し、彦岐に改めている。従つて吉田家は黒田家の播州以来の譜代の家臣と云うこ

となる。

吉田治年は四代増年の子で、万治三年六月一日に生れている。初め又助を名乗っていたが天和元年四月二十二才の時に藩主光之の命によって七左衛門に改めた。又其後正徳二年三月五十三才の時藩主宣政から式部を名乗る様に命ぜられている。

寛文九年三月に祖父吉田治年が藩主光之四十二才と嫡子長寛十一才（後綱政）を自宅に饗応した時、治年十六才ではじめて対面している。

寛文十二年九月には治年十三才で父増年とともに藩主光之に従って江戸に行き翌年福岡に戻っている。

延宝元年吉田知年はなくなりその遺跡五千石余は増年に与えられ家老格となる。

延宝四年十七才の時又父増年と共に長寛に従って江戸に行き翌年藩主光之に従って帰っている。

延宝五年藩主光之の命によって、十月五日治年十八才で元服の儀式を行い右筆所御用勤を命ぜられている。この年十二月八日に藩主光之は治年を呼んで年頭の御名代使者の大役を命じており、江戸に至り翌六年正月二日に素襖袴烏帽子を着して登城し江戸城本丸大広間に於て在国諸大名の名代使者に交って御太刀目録を献じている。

貞享三年七月五日七左衛門治年御館に召され、吉田六郎大夫増年願によって隠居・家禄五千石治年二十七才に賜い中老を命じられている。

翌四年十二月治年初めて長崎警固の四番々を命じられそれより家老になる宝永五年までの間に十度長崎警備をつとめている。

家老鎌田八左衛門昌生失脚のあと宝永五年正月治年四十九才にて家老職を命じられ藩主綱政の嫡子吉之の補佐家老となつて春より江戸へ行く様命じられている。

家老として綱政に提出した起請文は次の通りである。

天爵靈社起請文前書之事。

一私儀今度職分被 仰付難有仕合ニ奉存候然上者 御為第一ニ奉存心之及御奉公相務可申候事。

一御影暗覺悟毛頭御座有間敷候事。

附御用相務申衆ニ対無親疎 御為宜様。申談依怙最眞仕間敷候事。

一御隱密之儀雖為親子兄弟曾而出言仕間敷候事。

右之条々於相背者

神文

宝永五年三月十一日

吉田 七 左衛門

進上

治年

治年が大なる政治的手腕を持っていることは、職分就任以前の次の二事例を見ることによって知ることが出来る。

その一つは治年が中老を勤めていた間、元禄八年から四年間吉田家内の財政建直しのため他国勤の御免（他国での勤務を放免して貰う事）を藩主に願ひ出て許され、専ら借財整理と家政改革に専念していることである。治年が貞享三年家督を相続して後、家の財政苦しくとも、公務を支障なく勤めるため、自国他国の富人の財を借集めて公務に励み、私事に俟約を実行して来たが、そのため十年間に借銀総額百四十貫にも達し、この有様では永く務めることは出来ないと考えて、元禄八年八月八日に、御勝手方本締の家老斉藤忠兵衛貞則（後の丹下）を通じて口上書を差出している。その口上書は次の通りであった。（吉田家伝録十五 元禄八年八月八日の条）

口上之覚

私儀前々々不勝手ニ御座候ニ付内証候約仕或ハ他借之才覚を以漸只今迄相勤申候然共借銀買懸等都合百四拾貫目余ニ



及申候員数別紙書付差上申候希ハ、当年々四ヶ年之間簡略被  
仰付置被候ハ、<sup>(下脱カ)</sup>借銀買懸返弁仕相応之人馬を持御奉公  
相勤申度奉存候凡拜知高五千五拾石余之内、式千四百石御役人衆江相渡借銀買懸返弁仕候様ニ被仰付可被下候勿論四  
ヶ年之間江戸長崎隣国其外表立候務御免被成可被下候御当地ニ而常駄之勤或ハ御役目等ハ如何様ニも被仰付次第相  
勤可申候御預ケ郡并御二ノ丸火消役も無人ニ而不苦候て相勤可申候次只今迄持来候家頼士分之者ハ忝人も放シ申間敷  
候弥右之通被 仰付被下候ハ、難有可奉存候以上。

亥八月七日

吉田 七 左衛門

その結果八月二十九日願の通り、四年間他国勤務を免除され、除ケ知二千四百石は役人に渡さなくてよいから自分で  
処理するように家老齊藤忠兵衛から申渡されている。

そこで治年は家政に専念することになり、元禄八年九月六日家人を呼び集め次のことを申渡している。即ち彼の知  
行高五千五十石余の内二千四百石を借銀返済のために除き、残りの二千六百五十石余の内八百五十石余を以て家族の  
合力と家事日用の費財とし、その残千八百石を家頼中に分与する。従って四年の間は馬乗の家臣は知行高半減、無足  
の家頼は一人扶持の外は切米扶持方凡て半減とする。家頼へ貸した借銀は全部切捨て、やり、治年が印形について借  
りてやった家頼の借銀は除知の内から返弁させる。中間小者十五人被官の奴十二人下女二人を減らすも士分の者は一  
人も扶持放しをしない。乗馬一頭は福岡に置くが残りの馬は馬乗の身分の者に預け置くこと等の事を申渡しているの  
である。

かくして治年は元禄十一年三月朔日に出仕を命ぜられるまで、中老格のまま齊家に専念し、世事を省き親族親友の  
間饗応の招に応ぜず互に贈物を止め独居に勤めている。その間に家頼諸士の拝借銀米を公儀御借米同然に藩の役人に  
支配して貰って返済する様にし、治年の自家の長崎借銀の元禄八・九兩年の払い残り五十八貫目余の内二十八貫目を  
元禄十三年三月に、その残三十貫目をその年の十二月に返済してしまっている。この事によっても当時急迫していた

藩財政と同じく、藩の家老の家財政も公務である長崎警備や江戸参勤御供その他藩外での勤めのため藩から支給される手当以外に自弁の出費が多であつたことが知られるのであるが、治年はこの自家の窮乏を解決するためこの様に思い切つた処置をとることを藩に願ひ出て、実行に移している。

後世享保十三年（一七二八）に福岡藩に「勤休法」が定められ、貧困のために公の勤務に耐えない侍は、藩に申出て勤務を免除され、その間は禄高は減らされるが、その期間に家政の建直しをはかる制度が、藩の公の制度として一般に行われたが、（福岡県史第二卷上、八十五頁）この制度はこの享保十三年に始まつたと考えられているが、その母胎を二十三年も前に考え出し実行していたのが吉田治年であつたのである。この勤休制は、この治年の子吉田久兵衛栄年がまねてこれを制度化したものである。この享保十三年には治年は隠居してはいるがいまだ存命中であり、或は時の七代藩主継高が、隠居していた治年の意見をとり入れて実現したものであるとも考えられる。

更にもう一つ治年が政治的手腕を持っていることを証明する事柄としては、彼が中老を勤めている間に、長崎警備の責任者として度々長崎に派遣されているので、その間に非常事態が起つた際の緊急配備態勢を制度的に明文化せんとしたことである。

即ち治年が中老であつた貞享四年から宝永四年までの間に十度程長崎警備を命ぜられているが、その勤務の間に治年が気がついた事はこれまでの長崎警備の壁書は番所を守る方法についての条々ばかりであつた。しかも一旦変事があつた場合の警備配置の仕方については何ら定めがなかつた。そこで治年は元禄十四年十二月十二日藩主綱政の寵臣黒田（隅田）清左衛門重時にこの法制をつくつておく必要があることを上申し、黒田藩が長崎警備を命ぜられて以来の事件記録を調査し、且治年が実際に警備に當つた経験を考慮に入れて、法制二十通、口上書一通を完成し、これを翌十五年九月二十三日重時を通じて藩主綱政に提出、綱政はこれを熟読し、いる。そしてこの提出された法制について、宝永二年四月に藩主綱政は丹安左衛門元白を以てその實際に運用する場合の方法について詳細に質問している。

綱政はこの計画には同意したようであるが、まだ藩政に大きな影響力を持っていた光之が許しそうでないのを察して差控え、長崎警備に精通した治年を一番々にばかり命ずるようにすれば法制など必要なしとの態度をとっている。そして宝永五年には治年が家老職に任用され藩主綱政の嫡子吉之の補佐役として参府したために、遂に長崎の変事の際の備法が明文化されることなく沙汰やみとなっている。然し治年のこの企画は取り上げられることはなかったにしても、彼の藩政に対する意欲と情熱を如実に物語る事例として特筆さるべきものであると考えてよい。

前述の様に吉田治年が家老職に任命されたのは宝永五年正月のことであるが、治年はこの年の五月に藩主宣政の嫡子吉之の補佐家老となつて江戸に行き、老中の井上河内守正峯及び小笠原佐渡守長重と若年寄加藤越中守明英の邸に伺候して挨拶を行っている。(吉田家伝録十六宝永五年六月二十七日の条) ところが、吉之は二年後の宝永七年七月三日に死去したため治年は福岡に戻つたが、長子吉之死後次子政則嗣子となり將軍家宣の一字を賜つて宣政と称し正徳元年(一七一) 綱政の封を継いで藩主となるのである。正徳三年三月十三日に至つて吉田式部治年はこれまで家老黒田主膳重時が勤めていた「御当用本締役」を任命されるのである。この「御当用本締役」は当職或は当役とも云われ、治年はこの職について

私ニ云御勝手方ノ御用を御当用と云い、御財用裁判を掌ルヲ本締ト云フ

と云っている(吉田家伝録十七 正徳三年三月二十三日の条)ので、六七人の家老のうち月番の家老の上に立ち藩政の実際の権限を掌握する最も重要なポストであり、これから治年の八年間にわたる当役在任中の縦横の活躍が開始されるのである。

こゝで少しく福岡藩の家老に与えられた権限について言及しておく必要があると思う。時代は福岡藩主忠之の時に朔るが、寛永十年、栗山大膳によつて起された黒田騒動落着後に幕府から藩主忠之に与えられた次の覚書は、藩主の独断専行をいましめ、家老の権限を保証しているもので、福岡藩行政の上に後世まで無視することの出来ない大綱と

なっている。(三奈木黒田家文書63忠之公江成瀬隼人殿安藤帶刀殿の御覚書一通)

覚

- 一 御公儀へ御奉公之儀万事ニ付御由断被成間敷事。
- 一 長政已来御知音衆へ御無沙汰被成間敷事。
- 一 何事にてても新敷儀被仰付候ハ、年寄共と御双談被成御一門中并御近付衆へ被成御談合其上にて被仰付可然事。
- 一 御國中奉公人上下共ニ何様之訟訴在之候共其組頭を以年寄共ニ申聞せ致双談其上にて御聞候様ニ被仰付置尤ニ候わきより縁引にて直ニ申上候儀被成御承引間敷事。
- 一 御国にて公事沙汰聞候もの、儀年寄共と御双談之上にて可被成御定事。
- 一 御知行方之儀蔵入給人所共ニ其郡之奉行穿鑿仕郡奉行にて慥不明儀者年寄共双談之上にて申付候様ニ可被仰付候御知行方之儀ハ長政如御仕置可然存候。
- 一 公儀むきの奉公人ニ代官被仰付間敷候長政之御時代官已下被仰付候ほととの並のものを年寄共と御双談之上にて被仰付尤ニ存候事。
- 一 江戸より御国本へ被仰遣候万事御用之儀江戸ニ相詰罷在候年寄分之者ニ御双談被成御国本ニ罷在候年寄共方へ申遣候様に被仰付尤ニ存候御国本より御用等申越候ハ、江戸ニ在之候年寄共かたへ申越候様ニ可被仰付候自然御傍ニ被召仕候若キもの共ニ御用之儀被仰付候共其もの年寄共ニ相尋被談合申付候様ニ可被仰付候事。
- 一 奉公人新儀ニ御知行御出し候儀并加増被遣候共年寄共と御相談之上何も尤と申ニおいてハ可被遣事。
- 一 年寄分之者御定之事
- 一 鉄炮頭之事年寄共と御相談之上にて可被仰付事。

一江戸ニ相詰候年寄共御供番之者替之儀付り定供之事年寄共と御談合之上にて可被成御定事。

一江戸ニ相詰公儀むきの御用達候ものゝ事右同断。

一御在国之時御家中衆目見エ之儀一日ニ一度宛被罷出候様ニ被仰付可然候目見エニ出候時分之儀御定御出御あい可然事。

一御家中衆何方へ御使ニ被遣候共御呼出シ御直ニ被仰付可然事。

一江戸御供ニ被召連候小性衆之儀御家中之者二番め三番目之子式十人ほと年寄共と御相談之上にて可被召連事。

一御屋敷留守居之者公儀むきニ無構御屋敷之儀斗申付候様ニ被仰付可然事。

一栗山大膳出入之刻大膳親類共又ハ知音之者臈貞など仕候もの之様ニ自然御聞共一落相濟候儀ニ候間少も被懸御心間敷事。

一江戸ニ相詰候証人之事

以上

成瀬隼人  
安藤帯刀

三月廿三日

(黒田忠之)

松平右衛門佐様

以上の覚書のうち三分の二以上の条項が殆ど年寄の権限を保証した形となっており、要するに黒田家騒動を機会に藩主が家老の意向を無視して行政を行うことのない様に幕府から嚴重に申渡したものと考えることが出来る。

この覚書によって家老が関与せねばならぬ藩行政は次の通りである。

1. 新規に行はれる行政計画。

2. 国中家臣奉公人の訴訟。

3. 国元にて公事沙汰を聞く役人の任命。
4. 郡奉行にて解決不能の知行関係の問題。
5. 幕府との連絡に当る役人の任命（代官以外の代官級役人中より任命）
6. 江戸国元間の藩主の命令の伝達。
7. 藩主が側近に命じた場合も必ず家老を経由させる。
8. 知行の新授与及加増。
9. 家老身分の者の固定。
10. 在府家老の決定・藩主の御供番の者の交替・藩主の定供の者の決定。
11. 江戸詰の藩と幕府間の御用を勤める役人の任命。

11. 江戸参勤の際供奉させる小性・家来の二三男の二十人許りの任命。

大体以上の通りで、藩行政の人事・給与・企画等重要事項の殆どすべてが家老の同意を必要とする様に仕組まれている。

この時に規定された藩家老としての職務内容の範囲は、少なくともこの治年の家老職就任の頃まで引継がれて来ていたものと考えられるのである。

以上この章に於ては家老吉田治年が当役に就任するまでの、福岡藩の状態について簡単に述べ、治年が幼年時代より中老に就任し、その間に幾多の藩内の藩主、藩主の後嗣、家老職の栄枯盛衰を身近かに目撃して来たことを述べたつもりである。このことはこの後彼が当役として事に対処する際の、用意周到さ、及び決断力といったものに大きく影響を与えているのである。

（未完）

Toshiaki, Miki

## **A Study of Harutoshi Yoshida, Karō of the Fukuoka Han ( I )**

### Résumé

This study has investigated what special points Harutoshi Yoshida, the fifth head of the Yoshida family, made of in executing the administrative works of the Fukuoka Han, while he held the position of Karō from 1713 to 1721, under the control of the Rōjū of Tokugawa Bakufu. The paper will be serialized. This number contains only the preface.